

北海道余市郡余市町八幡山遺跡の調査（北海道余市郡）

株式会社シン技術コンサル 石川博行(士-335)

1. はじめに

八幡山遺跡は北海道余市郡余市町に所在する。遺跡は北に望む余市湾から約1.5kmの地点に位置し、町内東部を流れる登川左岸に立地する（写真1）。調査地点は丘陵裾の北東斜面部で、標高は8～10mを測る。古くから縄文時代後期の遺跡として知られており、調査地点西方の標高30m付近にはストーンサークルがあり、付近から石棒が出土している。調査は、一般国道5号倶知安余市道路（共和-余市）工事施工に伴うもので、平成30年度と平成31年度の2箇年行った。調査地点の現況は宅地と果樹園で、遺跡周辺には観光農園が多数所在する。調査面積は延べ2,418m²である。

2. 調査の成果

検出された遺構は、竪穴住居跡（SH・H）7軒、土坑（P）59基、小土坑172基、剥片集中10基、炉跡10基、集石4基、溝状遺構1基、性格不明遺構2基である（図1）。多くの遺構は調査区北部に集中する（写真2）。遺物は、土器（縄文・続縄文・擦文）、土製品、石器、石製品、陶磁器、金属製品、ガラス製品、その他に自然遺物などが出土している。

竪穴住居跡の時期は、擦文時代3軒（SH1～3）、縄文時代中期後半1軒（H1）、同中期末葉1軒（H2）、同中期2軒（H3・4）である。このうち擦文時代のSH1と縄文時代中期後半のH1について簡単に触れてみたい。

SH1は平面形が正方形（5.3m）を呈し、南西にカマドを持つ（写真3）。住居床面からは一括性の高い擦文土器が多数出土（写真4）しており、土師器（9世紀代）を伴う。カマドは住居廃絶に伴う儀礼行為によって天井が壊される。なお、同様の行為は他の2軒でもみられ、SH2では甕が倒置された状態で出土している（写真5）。

H1は壁柱穴を持ち、主柱穴の配置から、北東部が出入りとなる構造と考えられる（写真6）。



写真1 調査区遠景(南西から余市湾を望む)

この他に遺構ではないが、調査区内南西部を中心に色調が赤褐色を呈する土層（IIb層）がみられた（写真7・8）。IIb層は調査区全体でみられたものの、その由来は周辺の土層から判断できなかった。低位地形となる東部や南西部で層厚が増し、特に沢地形を呈する南西部では層厚20cmを測る。擦文時代の住居内では、覆土の下層で確認された（写真9）。10世紀に降下したB-Tm（白頭山苦小牧火山灰）の可能性が考えられたため同定分析を行ったが、特定には至らなかった。

3. まとめ

調査の結果、遺跡は縄文時代後期の他に、同中期と擦文時代の集落も存在するという新知見を得ることができた。新たにみつかった2つの時代の集落は、図1からも分かるように調査区の北部（縄文時代中期）と東部（擦文時代）に偏在する。擦文時代については平成30年度と平成31年度の調査区境付近が西限で、河川に近い調査区外東に集落の中心があるものと思われる。

擦文時代 これまで余市町では当該期の遺跡は5箇所、町の西部に集中していた。今回の調査によって、町の東部にも住居跡を伴う当該期の遺跡が初めて確認された。

続縄文時代 住居跡は確認できなかったが、平成30年度調査区の北東部にP8・13が確認された（写真10）。遺構の特徴から墓壙と考えられる。

縄文時代 中期の住居跡4軒、土坑28基などが確認された。H2の石囲炉（写真11）から幼体イノシシ骨が出土しており、本遺跡が所在する後志管内で2例目となる。

参考文献

- 乾 芳宏 2000「八幡山ストーンサークルについて」『余市水産博物館研究報告』第3号 余市水産博物館
小川康和・中塚凪沙他 2020『八幡山遺跡』余市町教育委員会



写真2 調査区北部の遺構集中

